

Title	印刷文化と手稿 - ヴァレリーにおける <モノとしての書物>
Author(s)	森本, 淳生
Citation	静脩 (1998), 35(1): 4-5
Issue Date	1998-09
URL	http://hdl.handle.net/2433/37493
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

印刷文化と手稿^{マニュスクリ}

ヴァレリーにおける〈モノとしての書物〉

人文科学研究所助手 森 本 淳 生

近代における書物の「モノ」としての側面を考えると、当然考慮に入れなければならないのは「印刷されている」という点である。グーテンベルクが印刷機を発明したのは15世紀中頃のことであったが、19世紀になると印刷技術の革新と出版流通革命により、書物も産業資本主義的な大量生産・大量流通の対象となる。書物はいわば「商品」という「モノ」になるのである。書物はこの圧倒的な「複製技術の時代」の洗礼を受け、さまざまな点で伝統的な「オリジナル」の概念は危機に陥いるのだが、ベンヤミンは、このことが反動的にいわゆる「芸術のための芸術」を生み出したのだと述べている。

ここでとりあげるポール・ヴァレリー(1871-1945)は、一方で「技術」を自己の「方法」の中心にすえた批評家であったが、他方では(とくに晩年において)時代の流れに抗して文学を「精神化」しようとする強い傾向をもっていた。ヴァレリーが今なお読みうるとすれば、それはこのような分裂や矛盾においてであろう。

『詩学講義第一講』においてヴァレリーは、文学作品の制作、受容、評価を、生産、消費、価値といった経済学的な用語で考察している。生産され、流通過程にのせられて消費される作品は、まさに「モノ=商品」であり、文学作品の評価もこのような交換過程においていわば交換価値として決定されるのである。文化のまったく異なる民族のもとでは、パンテオンも採石場にすぎず、詩篇も文法難問集に変じるとヴァレリーはいつている。そして、もしこのように作品の価値が交換過程において他者からの評価によって定まるのであれば、制作そのものもそのような交換過程から独立したものではありえない。「人間がひとりになることは困難である」というヴァレリーのことは、制作に没頭集中する作家の頭から読者という他者の観念がけっして離れないことを語っている。交換過程から

自律した「芸術のための芸術」や「純粹詩」など不能なのだということをヴァレリーはよく知っていたのである。それにもかかわらず、彼は文学の「精神化」を試みる。作品とは結局のところ「精神の作品」にほかならず、「精神の行為」においてのみ存在する。書物がまさに「モノ=商品」として大量に生産・流通される時代にあって、そのような流通過程にからめとられないような領域を確保するという夢を彼は抱いているのだ。作品の制作者は他者による価値を気にせざるえないと認めていたヴァレリーが、他方で、そのような交換価値とは一線を画した精神的価値をなんとか回復しようとするのである。

ヴァレリーの有名な創作理論に「作品の完成はありえない」というものがある。彼にとって精神とはひとつの「変形能力」のことであるが、これは本質的に作品をつねに変形(つまり執筆・推敲)し続けるものなのだから、作品の完成は作品の偶発的な「放棄」においてしかありえないことになる。したがって制作の現場としての手稿^{マニュスクリ}は、作品の完成がまったく顧慮されないような「書くために書く」という倒錯的なエクリチュールの場になるほかはない。ヴァレリーの『カイエ』(フランス語でノートを意味する)もこのような場として理解できるだろう。彼は1894年から亡くなる1945年までこの『カイエ』を書き続けた。朝方早く起きてコーヒーを入れ、それをすすりタバコをふかしながら『カイエ』を書きつけるという作業を毎日50年ちかくにもわたり続けたのである(その総数は約27,000ページにもなる)。紙幅の都合で具体的な分析を行うことはできないが、彼自身のことばによれば『カイエ』とは、偶然的な完成を目的とするような「外的生産」に捧げられるものではなく、純粹に自分の精神と向き合い、「生まれたての状態」にある諸観念を精神のもつ無

秩序そのままに書きつける場なのである。その意味で、通常の書物が何らかの首尾一貫性を持ち、常識的な作品が何らかの秩序や終結を含まざるえないのとは異なり、『カイエ』はひとつの「反=作品」であるといえるだろう。一般化していえば、マニュスクリとは、近代の印刷された書物が何らかの形で不可避免的にもたざるをえなかった首尾一貫性や起承転結から無縁な領域であり、限りない反復、削除、加筆、書き換えなどが行われる「反=書物」な場なのである。

こうしてヴァレリーは文学を「精神化」するのだが、注意しておくべきことは、ヴァレリーのいう「精神」とは明晰な知性とか明証的な意識のことではないということである。「精神」とは彼にとっては「無秩序」そのものである。

「作品の生産においては、創作行為は限定できないものとの接触によって生じる」とヴァレリーは書いている。そのため作家は無力であり、制作に必要なものが無秩序たる精神から生じて

くるのを「待つ」ほかはない。すでに見たように、マニュスクリという作家の「私的個人的」領域は、印刷などの複製技術の発達や資本主義経済の発展のいわばネガのようなものとして成立したが、そのように現実世界を回避することで見出された「精神の領域」はヴァレリーにとって無秩序であった。ところがこの「無秩序」こそ彼が『精神の危機』でとりだした現代世界の特徴なのである。作家の親近性の領域として見出されたはずの「精神の領域」は、作家が無力にならざるえないような無秩序の領域、いかなれば現実の世界とは別のもうひとつの「外部」へと変質する。つまり「内部」を通じてもうひとつの「外部」が見出されてしまったのだ。このように近代は、書物を「モノ=商品」としてあからさまに規定するとともに、以上のようなさまざまな現象を文学領域にひきおこしたのである。

(もりもと あつお)

全学共通科目「情報探索入門」の試み 図書館の役割について

平成10年度から、附属図書館が提供部局になって全学共通科目「情報探索入門」を開講した。前期科目として、授業開始日である4月13日(月)にはじまり、7月13日(月)に終了した。長尾真総長は、工学部教授の時代から「情報活用法についてはシステムティックに学生に教育する必要がある。図書館が中心になってやる情報活用に関する講義科目は、全国の国立大学ではほとんど例がないがその先鞭をつけたい。図書館職員の勉強にもなり、図書館職員の学内における存在価値が一層広く認識されるようになる。図書館職員と一緒に情報リテラシーの問題に取り組むことが必要である」と述べておられたが、図書館長時代の平成9年2月に具体的な授業計画の提案がなされ、何度も話し合いを重ねることによって実現するに至ったものである。講義は長尾総長を先頭に、川崎良孝教育学研究科教授、金子周司薬学研究科助教

授、黒橋禎夫情報学研究科講師とリレー式に担当し、最後に菊池光造図書館長が締めくくった。各講義に対応して演習をもうけ、図書館職員は全学から15名が演習を担当する形でこの科目に積極的に参加したことに大きな意義がある。

この科目の概略は次の通りである。

① 開講の目的は、「報告書を書くための情

